

【研修報告】

「The 27th Conference of the International
Association for Human Caring」

に参加して

戸村道子*

はじめに

第27回インターナショナル・ヒューマンケアリング学会(The 27th Conference of the International Association for Human Caring, 以下IAHC学会)は、2005年6月15日から18日まで、米国カリフォルニア州 Lake Tahoe で開催された。

筆者は、本学の開学以来からのヒューマン・ケアリングを基盤とした教育カリキュラムについて、再検討を加え見直していくために、本学稲岡教授を中心に、他3名と共同研究を行っている。今回IAHC学会に、学士課程のカリキュラム内容と教育方法に、どのようにヒューマンケアリング理論を反映させていくか、また海外の研究者・教育者との意見交換から示唆を得る目的で学会に参加し、ポスターセッションにおいて発表する機会を得た。そこでIAHC学会の概要とポスターセッションについて報告する。

ヒューマンケアリング(IAHC)学術集会の概要

IAHCは、文化ケアの多様性と普遍性の看護理論で知られるMadeleine Leiningerが、最新のケアリングの理論と研究について、研究者らがお互いにアイデアを共有する目的で1978年に始めたものである。当時「The National Caring Research Conference (ケアリング研究学会)」として発足され、1987年、42名の理事会員によって米国全土に活動が広がった。そしてさらに1989年、海外からの多くの看護者の要請に応え国際学術集会へと発展した。「看護の本質はケアリングであり、ケアリングは看護にとって独自性をもち、焦点を統一していくものである。」(IAHC学会, 2005)という哲学に基づき、毎年米国内、米国外と交互に開催場所を移して学術集会が開催されている。

今年は、米国カリフォルニア州とネバダ州の堺に

位置し、「先住民の聖なる湖」、「世界で3番目に深い湖」といわれ冬のスポーツリゾートのLake Tahoeの湖畔の会場で行われた。空気の美しく澄み切った森と湖の大自然の中での学会の開催で、国際学会というイメージから想像するような、近代的な設備のある会場とは大きく異なっていた。学会会場のホールの大きな窓から眺める、きらきらと陽を浴びて輝く藍色の湖と、遠くに高く聳え立ち頂に雪をかぶった山々とのコントラストの美しい景色は、まさに絶景であった。第27回学術集会のメインテーマは「Reflections and actions promoting harmony in caring environments. (ケアリング環境の中で調和をもたらす熟考と行動)」である。このことから、効率性・経済性が重視されテクノロジー化していく医療の中で、自然とケアとケアリング、癒しの調和した環境を作り、どのように看護実践、看護教育に取り入れていくかについてじっくりと考え、意見を交換するにはまさにぴったりの環境であった。参加者は、米国はもちろん、英国、オーストラリア、オランダや北欧、アジアからは台湾、タイ、また日本からも多く7組程度の参加があった。

学会の4日間の主なスケジュールは、朝食後すぐ7時45分から開始されるワークショップ、基調講演、午前・午後に行われる看護教育・実践・理論との研究に分かれた演題発表、ポスター発表、そして参加者との夕食、その後のヘルスケアに関連する芸術的なパフォーマンスまで含まれていた。質・量ともに濃い充実したプログラムが組まれていた。研究演題発表、ワークショップともに10人程度の参加で、各会場も発表者・参加者が話しやすいように、円くなって座る等、型にはまらないスタイルで行われ、演者と参加者が身近に討議できるように設定されていた。そのため参加者の一人ひとりが、熱心にディスカッションに参加し、自由で和やかな雰囲気があった。

*日本赤十字広島看護大学

早朝に行われたワークショップは、例えば実践に関しては、全体性と健康・癒しの輪として参加者自身の曼荼羅を描くといったユニークなものや、ケアを提供する者として健康・希望・心身の状態、これら五感を駆使し自己の内なる声に耳を傾けて、より調和を目指そうとする取り組み、またケアリング実践として援助の人間関係を妨げるような用語（コンプライアンス・ノンコンプライアンス）の概念分析からの見直しと討議等、多岐にわたって行われた。

筆者が特に興味を持ったのは、看護の「アート」の概念について、どのように教育の中でとりいれていくか、その試みについてのDr.Hegedusのワークショップであった。健康と病気に関連したさまざまな人間の経験に対して、より深いレベルでの理解を得るために、学生がケアリングを芸術的、審美的な方法でデザインし、表現するクリエイティブなプロジェクトが紹介されていた。このように看護教育の中で学生の感性を磨き働きかけながら、人間の理解、看護の「知」を探索していくことは、ケアリングを実践するための素養を習得していく上で大変重要であると思う。私自身の教育活動のなかでも、これをヒントにして方法を工夫し、取り組みを検討していきたいと思う。

看護教育、理論、実践についてのそれぞれの研究発表、ポスター発表の他に、朝食から夕食まで参加者と共にして知り合う機会も多く、話しをするうちに、共通の知り合いを持っていることがわかることがあるなど、「ケアリング」のネットワークが広がっていく印象であった。英語でコミュニケーションをとることについて、発表者や進行者が用いる“Sophisticated”な英語での挨拶や、鋭いと同時に優しく美しい繊細なケアリングについての描写に、聴いていて圧倒されることが多々あった。最初は緊張もあったが、考えを明らかに伝えようとするということが一番大切であること、参加者らと話をしていくうちに、お互いみんなの意見を「大切に」出し合うという雰囲気に大いに励まされた。

さらに、夕食後のパフォーマンスもすばらしいものであった。これらもIAHCを特長づける、知的で洗練され優美なケアリングの審美的表現であると思う。ナイチンゲールの言葉で語るハーブ演奏の引き語り、女優のMegan Cole氏のがんと闘う女性の物語を描いた一人芝居、そして閉会時においてのPatrick Dean氏（看護師であって、プロのピアニストではない）“A Reflection of Relationship-based Caring in Nursing”では、ジーンと胸を打つような美しい旋律のピアノ演奏と語りであった。

ポスター発表の概要

今回、示説発表を行った目的は、前述したように現在本学で共同研究を行っている、ヒューマン・ケアリング理論を基盤とした学士課程のカリキュラム再構築を目指して、学会の参加者と意見や情報を交換し示唆を得ることであった。

ポスター発表に興味を持って頂いた参加者からは、特に看護学士課程の教育カリキュラムにおいて、クラス単位のケアリングの取り組みでなく、教育プログラムの構成全体がヒューマン・ケアリング理論に基づいて組まれているのは、大変ユニークであるという意見を頂いた。また核となるヒューマン・ケアリングの特徴、および学生がこれらの概念をカリキュラムの中で「ばらばら」な状態から、技とアートである実習を通して統合していくプロセスについて、高い関心とフィードバックを頂いた。さらに、カリキュラムの中のそれぞれの講義名には、従来の画一化された名目よりも講義の教授内容を直接反映する名目であることがよい等のアドバイスを頂いた。ディスカッションの詳細については、IAHC学会の参加者の意見をもとに、学内の共同研究者とさらに検討を加え、別の機会に報告したいと思う。

おわりに

今回のIAHC学会の参加は、私にとって看護のケアリングのもつ「サイエンス」と「アート」の統合、繊細さ、審美さをもって洗練していくことの重要性を理解し、体感するまさに「eye-opener」となる機会となった。また、ケアリング理論や哲学、ケアリングの研究論文の中でしか出会ったことのないケアリングを追求している先駆的研究者らと、直接会ってお話ができることは大きな喜びであり、「インスピレーション」を掻き立てられるような経験であった。この経験からの学びを、現在進行中の研究だけでなく、日々の教育の中にも取り入れて活かしていけるよう努力したいと思う。

今回の大変貴重な機会を与えてくださいました本学に深く感謝いたします。

文 献

Wolf, Z.R. (Eds.) (2005). Proceedings of the 27th conference of the International Association for Human Caring. *International Journal for Human Caring*, 9(2).